

Freude

vol. 12-13 2019. 3. 6. wed

2/27は バスは Credo 6 7 a22.
姉は テナ 8 ~ 9 a 11 a22.
とゆう 男声 8 9. 姉は 3 4 5 10 11

大阪フロイデ合唱団 Tel 06-6358-2626
〒530-0041 大阪市北区天神橋2-1-18-4B
ホームページ <http://www.osakafreude.com>
メールアドレス info@osakafreude.com

「フッチーニ、この人」のつづき

(紙面に余裕(!?)あるので、後編一挙掲載☆)

前回「蝶々夫人」の作曲で終りましたが、「蝶々夫人」のフッチーニとは...

●自動車事故 (1903年 44歳)

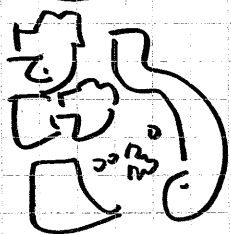
『トスカ』完成後、それまでモーター・ボートに凝っていたが、さらに自動車に興味は広がっていった。こうした時、しばらく前から喉の病気に悩んでいた。蝶々夫人の大半が完成した1903年2月23日、ルッカの専門医に診てもらうためトッレ・デル・ラーゴから妻子を同乗させていた。診察後、友人の家で食事を終えた頃、その夜は霧が深く、また霜のために道路は滑りやすくなっていた。友人のカゼツリは泊まっていくようすすめたが、断った。「蝶々夫人」を少しでも進めたいという気持ちが多かったし、夜は彼にとって一番の仕事時間でもあったからである。

ルッカから6キロくらい行って、ヴィニョーラという村の近くまで来た時、運転手が運転していたフッチーニの車は、急な曲がり角でスリップした。堤防を乗り越え、15メートルも落下し、転覆してしまった。妻子は免れたが、運転手は外へ放り出され、大腿部を骨折し、フッチーニは転覆した車体の下敷きとなって気を失い、吹き出すガソリンの排気ガスを吸い、窒息状態で発見された。幸いその近くに立派な医博が住んでおり、この人が物音を聞いて現場に駆けつけ、適切な処置が受けられた。彼の自宅へ運ばれ、フッチーニは右の大腿部の骨折と体のあちこちに打撲傷を受けていることが判明した。次の朝、モーター・ボートでトッレ・デル・ラーゴへ運ばれ、骨折箇所の手当を受けた。しかし、2、3日後に再び骨のつき直しをせねばならなかった。以後彼はピッコをひくようになったのである。全治8ヶ月の足の骨折で入院生活を余儀なくされた。この間彼が軽い糖尿病に罹っていることも発見された。

その後春になって、看護されながら車椅子でピアノに向かえるようになり、作曲を再開した。8月29日の手紙で蝶々さんが夜を明かす場面に置「間奏曲」を完成したことを書いている。9月15日に第1幕のオーケストレーション(管弦楽化)を完成した。そして1903年12月27日午後11時10分に全曲をついに完成した。構想から数えると3年以上の歳月を要したことになる。

●1906年台本作家ジャコーザが他界。

(うらへへ)



3/13(水)

18:30~

堀江Pitt

3/17(土)

13:15~

堀江Pitt
(分館2976)

3/20(水)

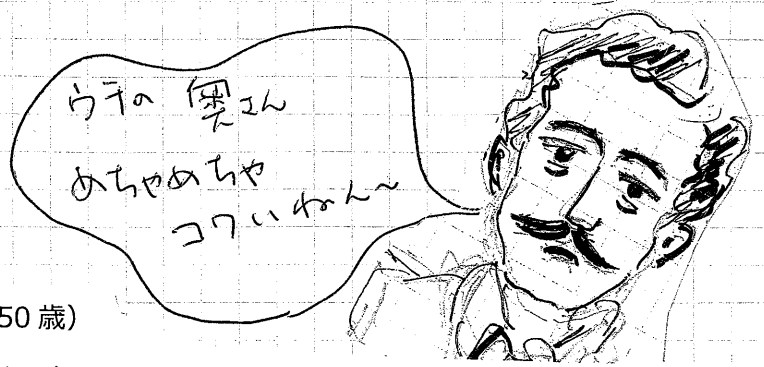
18:30~

堀江Pitt
(分館2976)

3/27(水)

13:15~

此花Pitt
(分館2976)



●ドーリア・マンフレディ事件 (1909年 50歳)

プッチーニの妻エルヴィーラが、遊び好きで交際も多い夫への日ごろの不満もたまり、全くの勝手な嫉妬心による誤解から、プッチーニが女中ドーリア・マンフレディと浮気していると責め立て、ドーリアを解雇したあとも、村中に罵詈雑言を言い募ったため、ドーリアは精神を病んで服毒自殺、エルヴィーラはドーリアの家族から起訴される。プッチーニはドーリアの家族に多額の和解金を支払って、なんとか、事態を収束した。この事件はイタリア中の新聞が取り上げる、大スキャンダルとなった。

プッチーニ自身には残像となり、自ら死を選んだドーリアの哀れな運命は、「修道女アンジェリカ」のタイトルロールや「トゥランドット」のリウに反映され、芸術の中で昇華されることにはなる。また残酷なエルヴィーラの姿は、「修道女アンジェリカ」では伯母、「トゥランドット」ではタイトルロールに象徴化された。

●1910年に会心の作品『西部の娘』を完成させ、1917年には『つばめ』を脱稿した。『つばめ』は、はじめオペレッタの作曲を試みながらも、自分の創作様式や能力が喜劇に不向きであると悟って、書き直された作品である。

●1912年には、恩人であったリコルディ社社主ジューリオが世を去る。

●<三部作> (1918年 59歳)

<三部作>とよばれる1幕オペラの連作は、1918年に初演された。パリのグラン・ギニョール劇場の様式による恐ろしいエピソードの『外套』、感傷的な悲劇『修道女アンジェリカ』、喜劇というよりは笑劇の『ジャンニ・スキッキ』の3曲からなる。

●最期 (1924年 11月29日没 65歳)

プッチーニはヘビースモーカーとして知られていたが、トゥランドット完成間近の1923年、喉の痛みを訴えて診療、なかなか正しい診断が出なかったが1923年末に喉頭癌であることが判明、これは本人には知らされず、息子アントニオが回復のために奔走することになる。翌1924年、治療のために滞在中のブリュッセルで、手術後に合併症を起こして急死した。

最後のオペラ『トゥランドット』は未完成のまま遺され、そのフィナーレは、彼の遺稿も参考にして友人フランコ・アルファードが補筆することとなった。しかし、アルファード補作の大部分は世界初演時の指揮者トスカニーニが冗長と見なしてカットしたため、その短縮した版が今日一般には公演で用いられている（もっとも、1980年代からは「アルファード完全版」の使用も散見される）。その他、1991年にはアメリカの作曲家ジャネット・マクガイアによるプッチーニ遺稿のより厳密な資料批判を経た補筆版、2001年にはルチアーノ・ベリオの独自稿による補筆版なども作成されている。

遺体は一旦ミラノのプッチーニ家の墓に埋葬されたが、1926年になって息子アントニオの手によりトル・デル・ラーゴの仕事場兼自宅に再埋葬された。